若き日のドキュメントとしての H. ジェイムズの二短編

三輪　誠一

1

Henry James (1843—1916) の作品の発表は1864年から始る。この時から向う約10年の間，彼は20数編の作品を発表する。彼は晩年，1907年から1909年の間に彼の小説作品の大半を収める標準的選集 (New York Edition) を編集するがこの選集に収める作品の選択に際し，特に短編の収録については，これを厳選して初期10年間の作品の殆どはこれを排除した。1875年以前の作品は，晩年の James の眼からみれば未熟な習作であり，円熟期の作家が自己の標準的選集に収録する作品の取捨にきびしい選択規準を設けたのは，けだし当然の措置であった。この選択によって残された初期の短編小説は下記の三編 "A Passionate Pilgrim" (1871), "The Madonna of the Future" (1873), "The Madame de Mauves" (1873) である。この三編のうち特に前二者については彼は特別の愛惜の情を感じていた。このことはこの二作品を収録する彼の選集第十三巻の序文の中に述べられている。序文はこの作品の創作後30年以上の年月が過ぎて作者が60歳の半ばに達した時に書かれた回想の文章である。彼は次の如くいう。"As I read over "A Passionate Pilgrim" and "The Madonna of the Future" they become in the highest degree documentary for myself—" 彼のいわんとしていることは，この二作品は未熟な点もあるが，彼の人生における最も重要な，生涯忘れ得ぬ時期に深いかかわりをもつ作品であるということである。ここでわれわれは彼の出生の年 (1843) から1870年代半ばまでの彼の人生の概略を知る必要がある。彼は生後6ケ月の時，両親，兄と共にヨーロッパにわたり，約1年間パリとロンドンで生活する (1843—44)。その後さらに2回，ヨーロッパ各国の旅行と滞在生活を経験する (1855—58および1859—60)。次に特記すべきは彼の四回目のヨーロッパ旅行である。1869年2月彼は26歳の成人としてはじめて単身のヨーロッパ旅行を試みる。彼は15ケ月をヨーロッパ各地で過し，翌1870年5月にアメリカに帰る。彼は幼少年時代からヨーロッパの風物や生活には十分に親しんできたが，成人後の単身のヨーロッパの生活は James の人生に決定的の影響を与えることとなる。このことは上記二作品とこれに関連する選集の序文，さらにこれら二作品と前後する諸作品を読むことによって明かになる。私は上記序文からさらに若干の引用をする。James はこの序文を書きながら，それより30年以前の1870年5月の帰国当時を回想する。次の引用文は当時の彼の心理的自画像である。"A part of that adventure had been the never-to-be-unforgotten thrill of a first sight of Italy, from Iate in the summer of 1869 on ; so that a return to America at the beginning of the following year was to drag with it, as a lengthening chain, the torment of losses and regrets."

彼は自分のヨーロッパ旅行を adventure と呼ぶ。最初の単独ヨーロッパ旅行と外国生活は彼にとっては確かに一つの精神的冒険であった。"thrill of a first sight of Italy" は，当時イタリヤからアメリカの家族に送った彼のいくつかの手紙の随所に見られる驚異と賛歎の声によって十分に推察できる。James 一家の過去三回のヨーロッパ旅行にはイタリヤ訪問は含まれていなかった。Swedenborgian であった James の父にとって

は，イタリヤもローマも関心の対象とは全くならなかったからである。未見の国イタリヤ見学とそれにつづくローマ生活は，James の第四回ヨーロッパ旅行において彼が予定していた最も重要な旅行目的であった。これより5年後1875年に James はヨーロッパ永住の決意をもって母国アメリカを去るのであるが，1870年の時点では彼の未来はなお漠然として未確定の状態であった。しかしこの旅行は，将来において彼の創造活動の源泉は，ただヨーロッパにおいてのみ求められるであろうという強い予感を彼に与えた。"the torment of losses and regrets" という語句はヨーロッパの芸術的土壌からはなれた失望，悔恨の表白である。上記引用につづいてさらに次の passage を引用する。"The repatriated victim of that unrest was, beyond doubt, accutely conscious of his case : the fifteen months just spent in Europe had absolutely determined his situation. The nostalgic poison had been distilled for him, the future presented to him but as a single intense question : "

1870年，Boston 近郊の Cambridge の自宅に帰り，父母と共にしばらく生活する James がまず感じたものは，アメリカの環境の与える違和感である。それは芸術家としての自己の未来に対する不安につながる。彼が自己を "the repatriated victim of that unrest" と呼ぶゆえんである。彼の nostalgia はヨーロッパ世界への郷愁であって，母国へのそれではない。彼はこれを nostalgic poison と名づける。未来が彼に提示する問題は，今後彼が作家として生活する本拠をヨーロッパ，アメリカ両世界の何れにおくかという選択の問題である。彼はこの深刻な問題をたえず念頭におきながら2年間アメリカに生活するが，この間にかねてから James 家の中で話題となっていた James の妹 Alice と叔母 Kate の二人のヨーロッパ見学旅行計画が具体化して James は彼等二人の escort として5度ヨーロッパに渡る機会を与えられる。1872年春彼等三人はまず英国に向って出発する。Alice と Kate はこの年5月より10月に至る5ケ月間のヨーロッパ各国旅行を無事終えてアメリカに帰るが，Iames はヨーロッパにとどまり，1874年秋，アメリカに帰るまで2年余りをヨーロッパ各地，主としてイタリヤにおいて生活する。この間彼は数編の短編小説を創作し，長編，"Roderick Hudson"（公的には彼の長編小説の第一作）の執筆を開始するが，彼は作品の制作以上に重要な問題を持っていた。これは前にふれた通り，彼は作家として活動し，生活する本拠をいずれの国におくかという問題を解決しなければならなかった。彼はこの問題に早晩結末をつけなければならぬことを承知しながら，最終的決断を下すことができず，逡巡を重ねながら，時に憂うつな気分に沈むこともあった。しかし翌1875年秋，彼はこの問題に解答を与えた。彼の選択したのは旧世界であった。James のアメリカにおける文学の友，William Howells の言葉の通り，"Harry James is gone abroad again not to return, I fancy, even for visits,"

2

James の精神を侵した poison とはいかなるものか。それは幼少年期から青年期に至る間，敏感な彼の感受性が捉えたヨーロッパの自然と社会の諸印象の凝結したものである。私はこれを James が彼の human document と称する初期の二作品の中に跡づけてみようと思う。

"A Passionate Pilgrim" は1870年の帰国の翌年に発表された作品である。これは1人のアメリカ人旅行者を語り手とし，この語り手がロンドンの宿で偶然知り合った，もう1人のアメリカ人の旅行者 Clement Searle の人生と運命を語る単純な構成の短編小説である。James 批評史において初期の批評家たちは，この短編の主人公 Clement Searle を James の分身と解釈し，この仮定の上に立ってこの作品を評価しようとした。（例えば Van Wick Brooks, Rebecca West 等）この解釈はその後の批評家によって修正され，今は語り手の旅行者をもって作者 James とみる解釈が妥当とされている。語り手も主人公 Clement も彼等の父祖の国，英国の歴史と文化に血縁的な親近感と魅力を感じている点では共通するが，現実の英国に対する時には，その反応には大きな相違を示す。Clement は情熱的な Anglomania であり，理性を失いやすいが，語り手は温和な Anglophile であり，寛容で冷静な観察者である。James の作品は長編，短編の何れも都市を背景とするものが

多いが，“A Passionate Pilgrim” は昔の姿と変らぬ英国の田園風景の自然描写に大きな力点のおかれた短編である。（小説の背景は後半に Oxford に移るが，大学の建築その他の風物の描写もまた生彩にみちている。）田園風景は England の中部の Malvern 鉱泉付近のもの，季節は春の四月である。James としては珍しく，彼は精緻多彩な自然描写を行い，またアメリカの自然風景との比較論を試みる。次に彼の自然描写の例を示してみよう。“The whole vast sweep of our surrounding prospect lay answering in a myriad fleeting shades the cloudy process of the tremendous sky. The English heaven is a fit antithesis to the complex English earth. We possess in America the infinite beauty of the blue ; England possesses the splendor of combined and animated clouds.”

James は二人の作中人物をして，アメリカの空の単純な青一色の美とは対照的な，英国特有の気象の現出する複雑な空の変化に驚異と好奇の眼を向けさせる。次の例は英国の風景画家 Constable の田園風景画を想起させる春の雲の細密描写である。“Over against us, from our station on the hills, we saw them [clouds] piled and dissolved, compacted and shifted, blotting the azure with sullen rain spots, stretching, breeze-fretted, into dappled fields of gray, bursting into a storm of light or melting into a drizzle of silver.” この精細な自然描写は1869年4月 Malvern 鉱泉に3週間滞在した際の周辺の自然風景の記憶にもとづくものである。なおこの時の旅行では，彼はスケッチブックをたずさえており，何枚もの写生画を描いている。上記の自然描写が明確，鮮明であるのはこのためである。Malvern 滞在後四月の終りに James は Oxford を訪れる。“A Passionate Pilgrim”の後半部はこの時の James の体験のfictionalization である。この小説の Oxford scene は，この学都の風物と雰囲気，それが二人の旅行者に与える印象，二人の示す感情的な反応などの詳細な叙述であるが，それを述べる前に私はここで語り手の眼を通して見た Clement の人生と性格について簡単な紹介をしておきたい。Clement はアメリカ社会における敗北者，不幸な結婚による人生の失敗者である。その家系において Clement の main family は，英国に住む富裕な大土地所有者 Richard Searle 一家である。彼は Richard から財政的援助を得る目的で英国を訪れるが，その目的は彼の期待に反して徒労に終ることとなる。彼の性格は語り手によって次の如く語られる。“a simple mind enough, with no great culture”, —— “a certain native grace”, —— “a true American full of that perplexing interfusion of refinement and crudity which makes the American mind” これは cosmopolitan としての James が当時のアメリカ人の一類型を多少の cynicism をまじえて表現したものである。

Clement の性格の outline は上記の通りであるが，彼の人生経験は彼に manic-depressive の傾向を与え，特にその渡英目的の失敗の後彼の感情は烈しい変化をくりかえす。Oxford の与える感動は彼の melancholy を忽ち ecstacy に変える。語り手の叙述を借りれば次のような昂奮状態がつづく。“I may say that from this time forward, with my unhappy friend, I found it hard to distinguish between the play of fancy and the labor of thought, and fix the balance between perception and illusion.”

彼の脳裏では現実と幻想が交錯し，その陶酔状態の中で彼の感動を語りつづける。それは狂人の饒舌にも似た magniloquence である。

次に語り手についていえば，James はこの語り手の人物像に当時の彼の心理的自画像を重ねている。このことは James の次の手紙によって明かであろう。この手紙は James が Oxford のホテルから1869年4月26日の日付で兄 William に送ったものである。これは相当に長い手紙であるが，その中に次のような一節がある。

“It was a perfect evening and in the interminable British twilight the beauty of the whole place came forth with magical power. …… As I stood last evening within the precincts of mighty Magdalen, gazed at its great serene tower and uncapped my throbbing brow in the wild dimness of its courts, I thought that the heart of me would crack with the fulness of satisfied desire. …… The whole place gives me a deeper sense of English life than anything yet.” 次に小説の

中の語り手のことばを引用すれば，"Of Oxford I feel small vocation to speak in detail. …… The impression it produces, the emotions it stirs, in an American mind, are too large and various to be compassed by words, It seems to embody with undreamed completeness a kind of dim and sacred ideal of the Western intellect, —— scholastic city, an appointed home of contemplation. No other spot in Europe, I imagine, extorts from our barbarous hearts so passionate an admiration." James の手紙の一節と彼の小説の一場面とを対比する時，Oxford における彼の感動の記憶が，作品の中の人物の心理に鮮かに再現されていることをわれわれは知るのである。

この作品の story としての興味は Clement の人生の adventure, 彼が英国の Searle 家の邸宅の中で遭遇する事件と諸人物，Clement の Oxford における急死の叙述の部分にあるが，文学的興味はむしろこの物語を語る無名の語り手の心理にあるというのが私のこの作品の読後感である。James の nostalgic poison の匂は語り手の内部にも感じられる。なおここで先に引用した自然描写の部分は語り手と Clement が Richard Searle の邸宅へ向う途中の Malvern 付近の田園風景であることを付記しておく。

3

"The Madonna of the Future" は James が1872——74年にヨーロッパに滞在した間に書かれ，雑誌 "Atlantic Monthly" 1873年3月号に発表された短編である。小説の形式は前作，"A Passionate Pilgrim" と同様にイタリヤ旅行中の一人のアメリカ人を語り手として，彼が Florence の町で偶然に知りあつたアメリカ人画家 Theobald の人生を語る回想談である。これは批評家の指摘を待つまでもなく，James が Balzac の短編"The Unknown Masterpiece" (1831) からヒントを得て書いた作品である。Balzac の短編の主人公の老画伯はすでにいくつかの大作を描いた後，終生の傑作を創作しようという異常な情熱にとらわれる。彼は一つの女性像を描きあげたが，それをさらに完全な作品に仕上げようとする執念に燃え，その女性像の上に飽くことなく絵具を塗りつづけ，自らはそれと知らずしてその女性像を塗りつぶす結果となる。彼に招かれた二人の弟子は，彼が完成を期待して制作中であると信ずる画布をみせてもらうが，それは雑然と多数の色彩を塗り重ねた画布にすぎなかった。しかしその時二人は混沌たる画布の片隅に一本の女性の足が抹殺を免れて明瞭に残されているのに気づく。生きて呼吸しているようなその足は，塗りつぶされた女性像がいかにすばらしい傑作であるかを彷彿させるものであった。二人は思わず驚嘆の叫びを発する。「この下に女がいるのだ！」まもなく老画伯は己の画布の実際に気づき，よろめきながら泣き叫ぶ。「何もない。何もない。十年もかかったのに。」翌日老画伯を訪れた二人は，彼が絵をみんな焼きすて，夜のうちに死んでいたことを知った。以上が Balzac の短編の荒筋である。しかし James の描いた Theobald の物語は，偏執狂ともみえる芸術家の情熱を描いた点では共通するが，そのテーマには幾分異る所がある。Theobald はすでに Florence に久しく住み，イタリヤのルネッサンス美術の数々の傑作を研究しながら，Raphael の作品に匹敵する Madonna の画像を描くことを夢想して，その毎日を制作開始準備に送っている。彼は一種の perfectionist であり，愛するモデルの女性をそのアパートにしばしば訪れ，大作のためのスケッチとノートを用意する。彼は自己の技量の進歩向上するのを待って大作制作の筆をとることを考えている。この間にすでに20年の年月が過ぎて彼のモデルは次第に老いて行くが，彼はこれに気づかない。ある日 Theobald に紹介されてモデルに会った語り手は，その直後，Theobald に向って次のように告げる。"…… You have dawdled ! She is an old, old woman —— for an Madonna !" この不用意な，短いことばは，Theobald が長い間抱いていた美しい幻影を一瞬のうちに打ち砕く。これは彼にとっては致命的なショックであった。彼はまもなく病床に臥し，語り手にみまもられながら，貧しい画室の中で最後の息を引取る。傍には空白の大きな画布が残されていた。これが James の短編の荒筋である。以下私は語り手と画家との間に取りかわされた若干の対話を引用して主人公の人物を示し，同時に作者 James の内部世界をも覗いてみようと思う。

"We are the disinherited of Art. …… The

soil of American perception is a poor little barren, artificial deposit. …… Our crude and garish climate, our silent past, our deafening present, …… are …… void of all that nourishes and prompts and inspires the artist, …… ” これは Theobald の語ることばで，しばしば批評家によって引用されるが，それはまた James の心理の一面を語るものである。それは James の Hawthorne 論 (1879) の冒頭部分にある次の有名な一節と表裏一体をなすものと考えることができる。

“…… the flower of art blossoms only where the soil is deep, …… it takes a great deal of history to produce a little literature, …… it needs a complex social machinery to set a writer in motion.” (付言すれば上記 Hawthorne 論はアメリカの文学批評家の間ではきわめて不評で多くの反論を受けた。)

Theobald のもらした歎声に対して語り手は次のような忠言を与える。

“Nothing is so idle as to talk about our want of a nutritive soil, of opportunity, of inspiration …… . The worthy part is to do something fine ! Invent, create, achieve !”

語り手のこの忠言は，James が時折自己に向ってひそかにささやいた内心の声であったと思われる。したがって上記の対話は James の内部の自問自答の声とみることができる。なお作者は語り手の受けた印象を叙述して Theobald の性格の outline を読者に次のように示す。

“I was more and more impressed with my companion’s prodigious singleness of purpose. …… If my friend was not a genius, he was certainly a monomaniac ; and I found as great a fascination in watching the odd lights and shades of his character as if he had been a creature from another planet.” 芸術家はすべて，ある意味では自己の作品の完成を唯一の目的として情熱を燃やす一種の monomaniac である。James もまたこの情熱には親近感を感じていたはずである。この情熱は芸術家にとっては貴重なものであるが，これが obsession となる時，それは芸術家の生命をおびやかす恐しい毒ともなる。Balzac の短編「知られざる傑作」はこの危険な情熱の引きおこす悲劇を描いたものである。James が nostalgic poison と呼んだものもまた危険な情熱の一種である。

Theobald は死の直前，熱に浮かされながら画室のベッドの上で空白の画布を指さして友人に次の如くいう。

“Since I have been sitting here taking stock of my intellects, I have come to believe that I have the material for a hundred masterpieces. But my hand is paralyzed now, and they will never be painted, I never began ! I waited and waited to be worthier to begin, and wasted my life in preparation …… .”

Theobald の Madonna の画像制作の情熱は彼をして豊かな芸術的風土としての Florence の絶対性，モデルの女性の永遠の若さと美しさとを盲信させた。しかしそれは彼の幻想にすぎなかった。彼の情熱は結局彼にとっては poison であり，そのために彼は20年の年月を浪費した後，その悲劇的な生涯を閉じたのである。

4

青年 James のヨーロッパ体験は，ヨーロッパが芸術家にとっては “all that nourishes and promotes and inspires the artist”を与える肥沃な精神的風土であることを確信させたにちがいない。しかし彼はヨーロッパが彼の胸中に呼びおこす情熱を nostalgic poison という不吉な名前で呼んだ。これはこの情熱が異常な方向を取る時，poison と変ることを彼が恐れたからにちがいない。

Clement を狂乱の果に死に追いやり，Theobald を Florence の魅力のとりことした後，悔恨と絶望のうちに悶死させたのはこの poison に外ならない。この両作品は古典的の学都 Oxford と芸術の都 Florence へ James が贈った tribute of praise であるが，また一方，その中には永住の地としてのヨーロッパ選択に迷う彼の悩み，作家として生きる未来への彼の不安が影を落している。(昭和52年9月14日)

付記

参 考 書 目

“Complete Tales of Henry James”, ed. Leon Edel, vols. 2—3

"The Art of the Novel : Critical Prefaces by Henry James", ed R. Blackmur.

"Henry James Letters", ed. Leon Edel, vol. 1

"Nathaniel Hawthorne" by Henry James, originally published in England in 1879.

"Henry James : A Biography" by Lean Edel, vols 1—2.

"The Early Development of Henry James" by Cornelia P. Kelley.